坂元中学校の生徒達によるディスカッション

平成24年12月18日（坂元中学校図書室）

山元町の復興に向けて

3年 齋藤（さいとう） 天（たかし） さん
3年 鈴木（すずき） 寿治（としはる） さん
3年 星（ほし） 大貴（だいき） さん
3年 大石（おおいし） 綾香（あやか） さん
3年 岩佐（いわさ） このみ さん

東日本大震災は、多くの子どもたちの生活も一変させた。家族のこと、学校のこと、友だちや先生のこと。困難の中でどのようなことを考え、行動したのか。また津波の被害にあった故郷・山元町への思いは。坂元中学校の3年生5人に、それぞれが体験した震災と、山元町の将来像を聞いた。

・・・・・・

―東日本大震災が起きた2011年3月11日はみなさんは中学1年でしたね。もうみなさんは最高学年の3年生。2年近く前のことになりますが、まず最初に震災の日にさかのぼって、どう過ごしていたのか教えてください。

星大貴さん　あの日は卒業式があったため帰宅が早くて、ぼくはこれからランニングに行こうとストレッチをしていました。庭先でちょうど走りだそうとした時、地震が来ました。近所に体の不自由なおばあさんが住んでいるのですが、けががなかったかどうか見に行きました。まだ揺れが続いていて、その揺れの中を走っておばあさんの家に行きました。無事が確認できたので、近所の人の車に乗せてもらって坂中（坂元中学校）に避難しました。その時、ぼくの家族は家にいなかったのですが、前から「地震があって避難が必要になった

ら、それぞれが坂中に避難する」って決めていたので。坂中に向かっていると、ちょうど反対車線から親の乗った車が来て、偶然再会することができました。祖母も坂中に避難して来ました。

断水になったので、中学生はプールに水くみに行ったりしていました。その時に津波が来たのを知りました。津波が来たので、みんな屋上に避難しました。その夜は坂中の3階で過ごしました。

鈴木寿治さん

鈴木寿治さん　ぼくは中浜区の友達の家で、友達4、5人と遊んでいました。地震の時は家の中にいて、テーブルの下にもぐりました。家の中ではタンスも倒れてきて危なかったので、頭を守るようにと…。けがはありませんでした。友だちのお姉さんが足をけがしていて歩けない感じだったので、どうしようかと話していると、友だちのお父さんが車を出してくれて運んでくれました。

ぼくを合わせて3人くらいは自転車で磯浜の漁港の近くにある高台の公園に逃げました。避難した後、津波が来て、公園の下の方までがれきが次々に流れてきたんですが、何とか大丈夫でした。公園には20人ぐらいが来ていて、その夜は近くの空いている民家で一晩過ごしました。車の中で過ごした人もいました。翌日に坂元中学校に行って、父と兄に合流できました。

岩佐このみさん　私は母と買い物をして、家に戻る車の中で地震に遭いました。岩沼市あたりです。道路はものすごく混んでいました。家に着くと、もう家が流されていて、津波が来たあとでした。

私は津波を見ていないんですけど、信じられなかったです。それで、母が勤めている事務所で過ごそうということになりました。父が岩沼市の病院に入院していて、姉が名取にいて、事務所で電話を掛けたらつながって、確認できました。そのあとは、車の中と事務所で避難生活を送りました。だいたい2か月ぐらい過ごしました。

大石綾香さん　私もその日は早く帰って、友だちと一緒に中浜小学校に行きました。お世話になった先生が今年でいなくなることが分かっていたので、先生のところにあいさつに行きました。学校について、低学年の子と遊んでいると地震がきました。それでほかの児童と、先生たちと一緒に屋上まで避難しました。一度は、「自転車もあるし、家に帰る」ということになったんですけど、保護者も学校に集まってきていて、テレビを見ていると「津波が来るようだよ」と

話していました。先生たちも「もうちょっといた方がいい」と言っていて、なかなか帰る感じではなかったです。

その時携帯電話を持っていて、まだメールがつながっていました。お母さんと2番目の姉は卒業生で、謝恩会をやっていたのですが、「とりあえず今、中浜小にいて、先生とかみんなと一緒に屋上に避難してるから」って連絡しました。その後、友だちの親が送ってくれることになって家に戻りました。家では祖母と一番上の姉がいて、「津波来るらしいから、とりあえず避難しよう」と行った時に、もう津波が来ていて、姉たちは走って逃げ始めました。私はスリッパだったんですけど、そのまま走って…。逃げる途中で姉が車を止めて、乗せてもらいました。家には母もいて、でも津波がそこまで来ているし、家もなくなっちゃうし、どうしようって、姉と泣いていました。

途中、かなり前に行った親戚の家を思い出して、そこまで乗せてもらいました。その後、父と連絡が取れて、夜になって父が迎えに来ました。その夜、母から連絡が来て、家族全員が無事だということが分かりました。親戚の家には1か月ぐらいお世話になっていました。後で船岡で借りられる家が見つかって、そちらに移りました。今もそこから学校に通っています。

岩佐このみさん

齋藤天さん　家でゲームをして遊んでいたら地震が来ました。こたつにもぐって3分間ぐらい経って出てみると、家の前が何か違う感じがしました。「いつもと違うな」と思っていたら、土煙が上がっていて、家の瓦が落ちていました。その時、祖父が小学校の方に、祖母は郵便局に行っていましたが、二人とも戻ってきました。家には車が2台あって、祖父も祖母も免許があるので、どちらも車で逃げようということになりました。家の西側に隣家がありますが、そのおばあさんは避難手段がないので「一緒に乗せて避難しよう」ということになりました。それで坂元中に避難しました。

―避難生活の間はどのような生活をしていましたか。

星さん　震災の次の日に福島県新地町にある母の実家に避難しました。新地の山の方で、電気は使えたんですけど断水になりました。山のわき水が使えたので、そのわき水を使って生活していました。食べ物については、あまり覚えていないんですけど、結構蓄えがあったので、それを食べたりしていました。火は使えていた気がします。

鈴木さん　坂元中で避難していた日もあったのですが、坂元支所に兄が友達と一緒にいるということだったので、そっちに合流しました。坂元支所には50人ぐらいが避難していました。はじめは電気がつかなくて、部屋で2、3本ろうそくを点けていました。部屋にいたのはほとんど知り合いの人で、それぞれがランプや懐中電灯を持って来ていました。高齢者もいましたので、あまり不安は感じませんでした。

齋藤さん　母の実家が白石市にあって、兄も白石の高校に通っていたので、母と父と一緒に母の実家へ行きました。祖父母は避難所で過ごしました。家族が別々に避難生活を送りました。食べ物はもしものために確保されていたものなどもあって、水は賞味期限切れてたりしたのがたくさん…500ミリリットルのものがたくさんありました。プロパンガスだったので、ガスは問題なく使えました。水は全然問題なく。食糧は…調達するのが、みんな買い出しに行って買い集めていたりしたので、ちょっと大変だったり。電気は山元町よりは早く点いたのかな…と思います。

岩佐さん　父の親戚が近くにたくさんいて、着られなくなった服などを持ってきてくれました。避難先は久保間地区ですが、電気の復旧は時間がかかりましたが、数週間のうちに復旧しました。断水は長かったです。父が白石市の職場で働いているので、勤務先から水をもらって来たりしていました。

―平成23年4月25日に学校が再開しましたが、それまでみなさんはどうやって過ごしていましたか。

岩佐さん　部活に行ったりしていました。友だちの家に遊びに行って、そのまま泊まったりしていました。

大石さん　久保間にいた時は、一緒に何世帯かと避難していました。そこに幼い子どももいたので、一緒に遊んだりしました。私の家は中がぐちゃぐちゃだったんですけど、姉や母と片付けに行ったりしました。時々、坂元中に来て、避難している友達と遊んだりしました。友だちの避難場所がバラバラだったので、「みんな大丈夫かな」と心配でした。

星さん　ぼくは原発の影響で、新地町に避難した後、すぐ山形に避難しました。メールが使えたので、姉の携帯電話を借りて、携帯電話を持ってる友だちと連絡取って、学校のことやいろいろな情報を得ていました。ただ、学校の連絡が入ってきても、山元町がどんな状況か分からなくて、それが知りたいと思いました。山形は全然津波も

齋藤天さん

星大貴さん

来てないし、雰囲気も全然違うので、そこが気になりました。

鈴木さん　最初は支所で生活していましたが、その後、名取市の会社に勤める兄のアパートに移りました。名取市の方では食糧も結構たくさんありました。その後、学校をどうするかという話になりました。坂中に行くか、それとも名取の中学校にするかということで話し合いましたが、名取の中学校の編入の手続きが間に合わなくて。「坂中にいて良かったな。坂中に残れて良かったな」って思います。今、ぼくは仮設住宅に住んでいます。

齋藤さん　電気が復旧したらテレビを見たり、あとは勉強をしたりしていました。母が亘理町に勤めていて、兄が白石で、白石に住むか、山元に住むか話し合いました。それで、白石に拠点を置くことになって、今は白石に住んでいます。

――今回の震災のあと、災害の備えについて対応した人はいますか。

齋藤さん　前から、津波が来る時は必ず坂中に逃げるということにしていたので、問題はなかったです。逃げる途中、マンホールが上がっている場所があったようでしたが、逃げるルートまでは考えなかった。ぼくは中小のほうからまわって坂中に逃げました。

鈴木さん　後になっても地震があって津波警報が発令されたときは、結構敏感になっています。その時ぼくは、家に一人だけで、一人で避難しました。やっぱり改めて地震が来ると、すごい怖いっていう思いは、以前よりも増しています。個人的に防災バッグとか作ってみたりしました。津波が来るとなったら、庭に逃げるか、震災の時に避難した親戚の家に避難するっていう約束を家族としています。

大石さん　今住んでいる船岡は津波の心配はなく、家にラジオや水や食糧は置いています。平日に何かあったら、坂中に来ることになっています。姉は高校生と大学生で、二人とも仙台方面なので、何かあったら連絡は取れるようにしています。私も、今も大きな地震があると、前よりも「怖いな」って思います。

岩佐さん　「とりあえず高い所に逃げろ」って言われても、いろんな物を持って逃げてしまうんですよ。だから「とりあえず携帯電話だけ持って逃げろ」ってみんなで言っています。

――みんなの将来の夢は？みんなが大きくなった時に、山元町がどんな町になっていたらいいなと思いますか？山元町は好きですか？

岩佐さん　駅がなくて、電車が再開していないのが不便。

大石さん　私も電車が通っていないのは不便だと思う。仙台とか、他の地区の高校に進学できなくなったりするのは大変だと思います。それに山元にいると、地震が来た時に「あ、津波、津波」って考えてしまって、安心感がないと思います。絶対に大丈夫っていう安心が欲しいです。

齋藤さん　駅よりもスーパーがないのが不便。スーパーが必要。

星さん　山元の人は他の地域にないくらい親切な人が多いと思います。ぼくは震災後、どうしても音楽がやりたくて、ギターを持ってある人を訪ねました。その人とは震災の支援で仮設の集会場でのボランティアで会いました。「また会おう」と約束していたのですが、具体的に連絡先は交換していなかったんです。最近は全然連絡を取っていなかったんですが、ぼくがその人を探しているとある人に話すと、すぐ連絡先を見つけてくれて、その場で電話してくれました。そのおかげで会うことができました。そして「一緒に音楽をやろう」ということになって、一緒に楽しく音楽をやっています。

鈴木さん　山元町は住みやすいと思う。海も山も近くにあって、遊び場がいっぱいあります。釣りもたまにするので、暇なときは磯の方に行ったり、自分の家の後ろの山に行って、キツネやタヌキを探したりして。自然があふれていてすごくきれいなところだなって思います。

齋藤さん　白石市は盆地で、冬は寒くて夏は暑いという気候ですが、それに比べて坂元とか山元町は気候がいい。大人は「初夏とか梅雨に冷え込む」っていうんですが、それでも住みやすいと思います。鉄道があった頃は便利だったんだなと思います。やっぱりスーパーが少ないので、生活圏が福島県相馬市の方や亘理町に分散するのがデメリット。ぼくが住んでいたところは治安が極端に良かった地域なので、近所の人に会うとみな「おかえり」って言ってくれます。「こんにちは」とかじゃなくて。ぼくのことを「あー、なになにさんの孫？」みたいなふうに聞いてくれるのが良かったなって。

大石綾香さん

―最後に、みなさんの将来の夢を教えてください。

齋藤さん　震災前から、「理科が好きなので科学者になってみたい」って思っていたんですが、震災前からの土地が使えるならば、祖父母がやっていたように畑や田んぼをやったり、

除染作業中の坂元中学校グラウンド（24.12.6）

農家になっても楽しそうだなって思ったりします。とりあえず就職できればいいのかな、とも思うので、平凡な会社に就職するのもいいかなって。

鈴木さん　僕の家も農家。自分の家で採れたお米を食べると、他で採れたお米よりおいしく感じます。親戚のハウスを借りてイチゴも作っていて、その時はイチゴのハウスに行って、勝手にイチゴを食べたりもできていました。ぼくも農家がいいかなって思うんですけけど、ぼくとしてはちゃんと働いて、山元町のためになるように頑張っていきたいなと思います。

星さん　ぼくはいろいろとやりたいことがあって、正直今も迷っています。やっぱり震災が関係するんですけど、今は食糧とか生活はどんどん改善されていって、空腹は満たされても、なんか心は痛んだままで…。

　そういう時にラジオで聞いた音楽にすごく癒されたんですよね。音楽が好きだし、やっぱり音楽や芸術みたいなところでしか満たせない部分はあると思うので、音楽系の仕事に就きたいって思っています。

大石さん　今のところは看護師になれたらいいなって思っています。父が獣医なので、やっぱり医療関係に少しでも関われたらいいなって思っています。人と話したり…関わったりっていうか、人と接することや、話をしているのが好きなので、いろんな人と関われるような仕事がいいです。

岩佐さん　幼い子の面倒を見るのが好きなので、保育士とかになりたいなって思います。保育所の時の先生が優しかったのでそういう先生になりたいです。

――この記録集を通じてみんなに伝えたいことがありますか。

星さん　山元町が好きなので、町が復興していく過程を見ながら、自分も成長していきたい。できれば山元町で人生を全うしたいです。

齋藤さん　やっぱり鉄道が欲しいですね。震災前から快速はだいたい、一つの町の駅に一回止まっていて、朝早く仙台に行きたい人は山下駅の始発電車に乗っていっていましたから。バスは信号もあるし、不便かなと思います。

鈴木さん　山元町が復興したら、山元町はおいしい物がたくさんあるので、食べに来てもらいたいなと思います。イチゴとか、ホッキ貝とか、リンゴとか、そういうのを食べてここまで育ってきたので。それに、農家の人たちも多くて、一生懸命な人も多いんじゃないかなって思います。自分の職業に誇りを持っていて、このすごい震災の後も農業や漁業を復興しようとしている。職業のプライドを感じます。

大石さん　これから人数が減って、もしかしたら違う小学校が一緒になったりということもあるかもしれません。もともと私たちが在校生の時も、すごく人数は少なかったんですけど。でも、このすごい津波でも、校舎だけでもせっかく残ったので、やっぱり母校だし、特別な思いもあるので、やっぱり校舎だけでも残してほしいと思います。

岩佐さん　30階建てくらいのビルが欲しいです。それは山元町が近代的で発展するように。町のシンボルになるような、スカイツリーのような建物があったらいいです。そしてあちこちからサラリーマンとかが働きに来て、日中は仕事をして帰っていくような都市がいいと思います。

今回のディスカッションに参加した坂元中学校３年生達。大きな夢が膨らみます！

インタビュー

山下第一小学校教頭
髙橋（たかはし） 伝（つとう） 先生

学校がすべきこと、そして子ども達の心のケアを考える

震災が起きた瞬間、山下一小（当時齋藤博校長、児童113人）では、2年生以上が6校時目の授業の真っ最中。すでに下校になっていた1年生の何人かは校庭や屋内のプレイルームで遊んでいた。髙橋教頭はいつものように職員室の自分の席で仕事をしていた。

「ああ、地震だ」と思っていると想像を超える大きさの揺れになってきた。「いつ収まるんだろう」。そう思うと同時に、「収まったら、すぐに緊急校内放送を入れて、子どもたちを指定の避難場所に避難させなければ」と考えていた。しかし、その間も一向に揺れは収まる気配がない。

ガッシャーンと何かが倒れる音、机の引き出しがバンバン飛び出す中、いろいろなものにつかまりながら職員室の中で緊急放送ができる場所までようやくたどり着いた。

先生方には「大きな地震です。子どもたちを安全に避難させてください」と連絡し、児童には「先生の指示のもと、児童のみなさんも避難しなさい」と放送した。校庭で遊んでいた1年生は校庭の中央に移動するよう指示され、体育館で卒業式の練習中だった6年生は全員、体育館の中央に集まった。揺れが収まる合い間をぬって全児童が校庭の第一避難場所へ避難してきた。

全員の人数を確認。当時学校にいた児童、教職員全員にけがはなく、安全が確認できた。その後、体育館に移動。体育館はわずか3か月前に耐震工事を終えたばかりで、安全だった。

保護者へ連絡しようとしたが、外部との通信は間もなく途絶した。また、子どもたちを体育館に避難させる前に、教育委員会に「児童は無事」と連絡しようとしたが、すでに電話は通じなくなっていた。

地震後、30分ほどすると、地域の住民が次々に避難してきた。当時、津波の発生については、学校にも保護者にも情報はなかった。学校から引き取った子どもを車に乗せて自宅方向に向かう途中、反対方向から車がたくさん来て津波の発生を知り、あるいは、津波を見て引き返してきたという保護者も何人かいた。学区内の牛橋、吉田地区は津波の影響が大きく、地区の避難者も含めて500人近くが体育館に避難してきた。フロアーだけでなく、ステージにも、さらに一部の教室も使って、最初の一夜を過ごした。

当時、学校にあった緊急物資は毛布が50枚だけ。水も食料もなかった。床には体育館にあった運動用マットや校内のござを全部出して敷いた。毛布は高齢者と子どもを優先に配った。停電していたが夕方になると地域の副区長、高橋さんから発電機が提供された。それを使ってストーブをつけ、ステージ側にスタンドの照明も付けた。髙橋教頭は名取市に自宅があり、山元

町まで通っていたが、その夜から数日は学校に寝泊まりして、子どもたちの確認や避難者対応をした。

齋藤校長は避難者を見て「食事を出そう」と決断した。燃料と食材があれば、学校の給食室で調理ができる。トップの決断に従って、食材をかき集めた。みそ、コメがあり、みそ汁とご飯は何とかなりそうだ。ただ電気が止まって断水になっていた。井戸水を使っている家庭が水を、農家がコメを、さらに地元の燃料店がガスボンベとコンロを提供してくれた。

直ちに調理員2人と女性職員、地域のボランティアさんも加わって仕込みに入り、おにぎりとみそ汁を提供した。髙橋教頭と職員1名は地域の雑貨屋に頼んで店を開けてもらい、サランラップや紙皿やコップなど必要なものを準備した。朝昼晩と3食出したが、それが話題になり最高で3日目には700人以上が避難生活を送っていた。校庭に避難してきた車は約200台ほどになった。

避難当初、食事や避難者の健康管理などは、齋藤校長を中心に学校職員と横山区長（加藤様）でおこなっていたが、これだけの大きな避難所になると避難者自らの組織が必要になってきた。2週目に入るころ、教職員は避難者対応のほか、校務について考えなければならなかった。また、避難者からも「みんなでこの難を乗り切っていかなきゃいけない」と声も上がり、避難者の中から本部長を選び新しい組織ができた。学校の教職員はサポートに回った。震災から4、5日目には自衛隊が来て、食事の提供が始まった。

約10日後の3月23日、校舎3階のプレイルームで卒業証書授与式を行った。参加者は保護者のほか、避難所の本部長と横山区長だけだった。齋藤校長は卒業証書を渡し、「くじけず頑張ってください」という内容の言葉を贈り、卒業生の巣立ちを激励した。

春休みの間も子どもたちの生活は落ち着かない。そんな中、学校では子どもたちが気を紛らわせ、学力をつける場を設けた。先生とボランティアの大学生が子どもたちの学習支援を行った。児童のなかで両親を亡くした子どもはいなかったが、祖父母を亡くした家庭があった。

4月25日から新年度が始まったが、学校の避難所はその後も2か月ほど続き、6月12日に閉鎖した。その間、避難者の一人が低体温症で亡くなった。閉鎖時の避難者は約20人で高齢者が最後まで残った。

学校の大きな目標は、「本来学校でやるべき行事や教育活動をできる限りきちんとやることだった」

子どもの心のケアも重要で、臨床心理士やカウンセラーに来てもらい、直接相談にのってもらった。ボランティアの支援も子どものケアには大きな役割を果たした。

震災から一年半後、モデルで書家の矢野きよ実さんに来ていただいた。子どもたちは「書」を通して心の内を文字で表現した。

「直接的なカウンセラーによる心のケアもあれば、日常の教育活動を通じた子どもたちの心の解放も重要」と髙橋教頭は言う。これからも、教育を通じて子どもたちの学びと育ちを充実させていきたいと語った。

当時の齋藤校長は震災発生から避難所対応、教育活動の再開までをまとめた資料集「3・11震災当日～8月まで」を作成した。今後の防災、子どもたちの支援などに役立てていきたいと考えている。

明日への希望

復興を祈念する様々なイベントが催され
町は笑顔と活気を取り戻していく

自衛隊お別れセレモニー（H23.8.1）

小平区夏まつり（H23.8.14）

子どもも大人もみんなで遊び隊（H23.9.11）

坂元小・中浜小 合同運動会（H23.10.8）

花釜区復興祭（H23.10.29）

山元町ふれあい産業祭（H23.11.23）

共徳丸
祝
大